相馬御風 生誕140年 140th Anniversary

四季折々の御風さん

No. 3

御風さんが故郷糸魚川へUターンするのに選んだ月が3月です。大正5（1916）年、32歳、大学進学と仕事で14年間生活した東京に別れを告げました。

「Uターンの3月」

江戸時代が終わって明治時代になり、西洋文化が流れ込むなか、文学をいかに新しくするか、加えて、いかに商業ベース（文章を売るシステム）に乗せるかという動きが生まれ、加速します。

高等教育機関（大学）で学んだ文士、学校教育で高まる識字率*1、製紙・活版印刷技術の革新、新聞・雑誌等の出現、読書人口の増加…土壌が広く切り開かれ、書き手のまとまりも出来ました。

当時、文学の最大潮流「自然主義」を進める早稲田大学界隈にはビッグネーム坪内逍遥がいて、その教えを受けた島村抱月がNo.2。その二人の門下で若くしてNo.3の地位にいたのが御風さんで、文学評論家として世に一目も二目も置かれ、将来を約束された存在でした。

けれども！御風さんは、そのような絶大なインフルエンサーの地位を捨て、故郷に帰りました。

なぜその選択なのかを自己分析、告白した本が『還元録』です。ここには、華々しさの陰にある誰にも知られたくない、心の奥の、踏み込めば痛みが走る場所にメスを入れたことが書かれています。そして、虚飾にまみれ、疲れ、自失した状態で、長く深く悩み苦しんだ末に、根源的なものに戻りたいとする気持ちが勝ったのです。

さてそこで、ふと考えてみると、裏を返せば糸魚川に帰る価値があったということになります。その価値とは、御風さんよりも前の時代から受け継がれてきた風土、歴史、文化、人々の心です。生まれ育った地は、ガッチリと御風さんを受け止めます。

上京し、名をあげることに価値があるとした世の概念に背いたわけですから、邪推や批判もいっぱいされました。

しかし！御風さんはもうそんなところに留まっていません。だって、3月、弥生でしたから。糸魚川でやりたいことといっぱいありましたから。

次号へつづく ≫

*1 識字率：文字の読み書きができる人の割合

問合先　文化振興課　文化行政係　☎552-1511

unesco Global Geopark

糸魚川ジオパークだより ｜第123号｜

Itoigawa Geopark

問合先　商工観光課　ジオパーク推進室　☎552-1511

水島ガイドのおすすめ見どころ

白山神社

素敵なお宝がたくさんある場所です。春季大祭の舞は必見ですよ！

社額に、徳川慶喜、前島密の書を掲げていることをご存じですか？

4月24日には、境内の池の上に作られた水舞台で、稚児舞をはじめ11曲の舞が奉納され、日没間際の真っ赤な衣装の陵王の舞でクライマックスを迎えます。

かやぶき屋根の拝殿の裏手の尾山には、ヒメハルゼミがいます。1匹のリーダーが鳴きだすと一斉に素晴らしい声で鳴きます！

一の鳥居をくぐると左手にある手水舎の大きな石は鬼伏のもの。陸路で並べた丸太の上を転がせて運んだとか！大変な事ですね！

無地の緋色の衣に龍神をのせた面をつけ、二の鳥居の中心に沈む太陽を招く「日招きの舞」が大好きです。（水島）